

授業方法について独自に工夫していること 【人文社会科学系】

講義を聴くだけだと、どうしてもぼんやりする学生が出てくるので、以下のことを取り入れている。

- ・学生を2人一組のペア活動を取り入れ、全体で発表する機会を多く持つ。

例:2人で意見を出し合い、その後それぞれのペアの意見を発表する。

- ・個人にプレゼンをさせ、それを他の学生が評価する(内容の分かりやすさ、パワポの工夫、話し方など)。

評価シートは教員だけがわかる形で記名させ、後でそれぞれに自分の発表についての無記名の評価表を渡す。

最初の1班のみ、研究室に呼んで、レポートの仕方を説明している。最初がよければ、あとの班はそれをまねしていくので、最初が肝心と心掛けている。

英語学概説ということから、英語学については是非身につけておいてほしい内容を扱った。また、履修している学生の中に教員を目指す学生が多いことを意識して、教員になった時に役立つ内容を中心に授業を構成した。

発音の仕方を身につけるという技能習得の面が強いため、練習の機会を授業内で設けるようにしている。同時に、大勢の受講者がいるため、授業内では個々の発音の仕方に注意を払うことができないため、授業外での対応も行っている。また、詳細な口の使い方が分かるように、視聴覚資料をできる多く提示するように試みている。

演習授業ではあるが、各自の発表の前に、必ず作者について、時代についての概説を行い、共通理解を深められるように授業を構成している。

毎回の発表後、学生同士で相互評価を行わせるために、コメント用紙提出を必須としている。

- ・積極的に発言しない(できない)学生には、答えやすい質問をふることで、話しやすくする。
- ・学生の意見を否定せず、しかし、別の考え方もできることを説明し、多角的な視野を身に着けてもらう。
- ・とにかく、こちらが楽しそうに話す(本当は楽しくなくても、楽しそうに話す)。

授業の進展に応じて、様々な映像の視聴を行い、日本語の方言の使用状況についての理解に努めている。また、授業参加者に、毎回、授業のポイントと質問(なければ感想)を書いて提出してもらう。そして、できるだけ、理解を先延ばしにしないために、次回、質問に対する答え、誤解に対する訂正から授業を始めている。

この授業の目的はドイツ語の文法力、読解力を養成するだけではなく、ドイツの歴史を学ぶとともに過去を振り返り、将来のドイツや日本のことを考える機会を提供することである。そのためにユダヤ人の迫害に関する映画を鑑賞する機会を設け、感想文を書いた。またトーマス・マンの「ドイツとドイツ人」の抜粋を読み、歴史的の勉強を行った。アンケートの間2や間3で高い評価が出ているのは、こうした授業の内容を反映したものであろう。充実した授業が出来た。

PowerPointなどを用いている。映像資料などを用いている。

学生が主体的、能動的、自律的に授業に関わり、学修できるようにしている。初回の授業で学生に既習事項、授業への関心、ニーズ、学修目的等に関するアンケート調査を行う。また、授業に関する期待、希望等についても回答してもらう。さらに、学生の趣味、関心、アルバイト、サークル活動、国際交流、留学経験、海外研修経験等についても、任意で差し支えない程度に回答してもらう。それをもとに、授業中、あらゆる場面で学生全体、または、個人のニーズ、興味関心等に学修内容(授業内容)がどう関わっているかを確認し、学修の意義を考えながら授業を進めている。言い換えれば、当該授業での学修内容が学生のキャリア形成、キャリア開発等にどうつながるかを意識することで、学修目的、到達目標を明確にして授業に臨むことができ、主体的、能動的な学修が促進されると考えている。授業後の省察も行っている。

講義形式の授業については、なるべく自身の言語活動との関連で授業内容を捉えることができるよう、課題や話題を用意している。演習形式の授業については、特段のルールが見えにくく、一見、無秩序に見えることばの用法が、実は一定の約束事の下で用いられていることがおのずと浮き彫りになるよう、手順を踏んで整理することの重要性を理解させることに力を入れている。

学生の興味、関心はひとりひとり異なり、一斉授業でのきめ細やかな対応は難しいことも多いが、課題を一人一人の興味に従った自由選択とすることで、少しでもニーズに沿うように心がけている。受け身の授業にならないよう、レポート作成や口頭発表を課し、プリント配布や説明の仕方にも留意をし、授業中に学生からの質問や発言がしやすい雰囲気作りに努めた。

パワーポイントに沿って授業を進める形を基本としながら、適宜、新聞等による最新の話題にも触れ、現代社会の抱えるさまざまな問題への興味関心を喚起するよう努めている。レジュメおよびワークシートを毎回配布して、理解を深めるよう工夫している。講義形式の授業であるが、学生の発言機会をできるだけ設けている。

この授業では学生がみずからの視点、関心に基づいて主体的に課題に取り組めるように、学生発表や質疑、討論を中心とする授業方法をとっている。

一学期で中国文学史という広範な内容を講義するため、授業の最後にその日の講義内容に関する問題を出すことにしている。その解答を確認することによって理解状況を把握するとともに、学生に対し重要なポイントを明確に示す狙いがある。

外国語演習Ⅲは、今回担当するのが初めてであったので教科書を用いた(外国語を扱う授業なので、英語以外でもよかったが、冒険することをあきらめ、英語を選んだ)。ただ、教科書は平易なので、受講者にはそれ以上のことを調べて発表してもらうよう指示した(が、十分でなかった。もっと強調すればよかったと反省している)。
音声学は、知識を与える形の授業だけでなく、頭を使ってもらうよう、演習も行うようにした。音声面での身近な現象はいくらでもあるので、それらをできるだけ多く紹介するよう努めた。

人数の関係で全員に発表を割り当てることができた。発表を通して、教科書から読み取れる内容にプラスして、関連事項を自分で調べて人に分かりやすく伝える訓練の機会を与えた。英語論文の内容に関するレポートを課したが、これは外国語であるがゆえに同じ文章に何度も目を通す(予習、授業、レポート執筆の最低でも3回、ふつうは4~5回読むはずである)ことで、文の構造、内容ともにじっくり考えながら読む機会を得ることになる。日本語ではできない思考の訓練であるといえる。今回は、何度読んでも価値のある論文を選んだと思っている。

言語が自然の産物ではなく、社会的に形成されるものであるということを、日本語の女ことばの成り立ちや海外の言語政策のあり方を探ることで理解してもらうため、このテーマに関しては発表形式を取り入れた。

古い時代の言語研究を扱う場合、その時代の政治的・社会的背景について理解することが重要なので、それに関しては、学生による発表を行った。また、英語の学術文献の読解力をつけてもらうために、講義で扱った内容を踏まえた英文の専門書の一節を講読した。

必ずしも文学に興味のある学生だけが受講するわけではないので、あまり専門的な話をするのではなく、ストーリーの面白い作品を選び、その作品の面白さを伝えながら、アメリカ文学の特色というべきものの幾分かでも伝えられるよう、工夫している。

- ・最近、高等学校で地理を学んできていない学生が9割以上である。そのため、基礎的な知識が不足していると思われる。そこで、講義の1, 2時間目は、自然地理の基礎的な知識を学んでもらうために、地形や水文の概略を説明した後に、気候の内容に入るようにしている。
- ・将来教壇に立つ学生である。知識の詰め込みではなく、対話形式で授業を進めることにより、自ら考えることの大切さを学んでくれればよいと思っている。
- ・耳学問にならないように、雨温図や白地図などを使った作業学習を取り入れている。

古典文学を研究する上で欠かせないくずし字の習得を目指すため、江戸時代に作られたテキストを用いて、くずし字を読む練習を数回行った。妖怪がテーマの挿絵のある作品を取り上げ、興味を持って取り組めるよう工夫した。

グループ発表(2~3人)では、発表の成果と問題点を共有するため、発表担当ではない学生も事前に当該作品を読み、発表に対してコメントさせた。発表担当グループに対しては、1週間前までにレジュメを提出させ、改善点を指示した。また、教育大学という特色を生かし、教材としての観点からも作品を分析させた。

このように、参加者全員の丁寧な読みによって、物語が持つ様々な魅力を明らかにし、議論する力を養うよう努めた。

半期だけのロシア語入門の授業のため、文法としては文字や簡単な挨拶から始め、ごく初歩的なことしか触れることができない。そのため、学生たちが興味を持てる内容になることを重視し、習った文法事項はなるべくグループ・ペア練習の中で会話などを通じて使ってもらえるようにした。そしてロシア語文法の基礎知識を身につけてもらい、今後の言語習得に役立つような授業を心がけた。また、異文化に触れる機会であることも考慮し、言語の問題以外にも、文化や国民的な個性などについても折に触れ話をした。

学生の参加が得られるように、必ずランダムで指名したうえで、授業内容に関して質問をするように指導している。質問が出ない場合には、すべて理解していることとみなし、こちらから授業内容について質問をするため、真剣に授業を聞くようになった。

特別なことはない。まず、教授する内容をセレクトし、それを論理的に配列して、学生が理解しやすい、また興味をつなぎやすいような構成とすることに留意する。使用する史料はプリントに印刷して配布する、板書は話の構成が辿れるようにレジュメ化した形で明確に書く、話すときは学生の反応にも注意して、必要に応じて繰り返し説明することも避けない。そのため、時間に多少の余裕があるように内容は精選しておく、などの当たり前の作業を重ねるだけである。

できるだけ、教科書などのもとになる史資料をコピーして、学生に配布しています。